

琉球大学学術リポジトリ

森林美学誕生の歴史と森林管理における今日的意義

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2020-10-14 キーワード (Ja): 森林美学, ザーリッシュ, ゲーテ, 郷土景観, サイコトープ, Schlüsselwörter: Forstästhetik キーワード (En): v. Salisch, Goethe, Heimatlandschaft, Psychotop 作成者: 芝, 正己, Shiba, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46986

森林美学誕生の歴史と森林管理における今日的意義

芝 正己
琉球大学名誉教授

Geburtsgeschichte der Forstästhetik und deren heutige Bedeutung in der Waldbewirtschaftung

Dr. Masami SHIBA
Emeritierter Professor, Universität des Ryukyus,

Kurzfassung: Der Schlüssel zur Forstästhetik liegt in der Idee, die Holzproduktionsaktivitäten mit der Schaffung wunderschöner Wälder in Einklang zu bringen, d. h. "Harmonie zwischen Wirtschaftlichkeit und Schönheit von Bewirtschaftungsforst". Dieser Gedanke wird im Kontext sozioökonomischer und kultureller Fragestellungen zum Umgang mit Wäldern diskutiert, die im Laufe der 100-jährigen deutschen Waldentwicklung einen hohen ökonomischen Stellenwert haben und die dadurch verloren gegangene Schönheit der regionalen Landschaft widerspiegeln. Es wurde von Riches Buch und seiner tatsächlichen Waldschöpfung genährt. Schließlich wird die Forstästhetik von der Gesellschaft durch die Heimatschutzbewegung bewertet und akzeptiert, eine sogenannte lokale Landschaft, die sich aus deutschem Naturschutz, Ackerland und Wäldern zusammensetzt. In diesem Aufsatz habe ich zunächst den Hintergrund der Entstehung der Forstästhetik in Bezug auf den Entwicklungsprozess der deutschen Forstwirtschaft und verwandter Gebiete wie Aufklärung und Romantik erörtert, die sich zu dieser Zeit hauptsächlich in Europa entwickelten. Insbesondere durch Goethes Amtsgeschäfte als Gerichtsberater während der Weimarer Zeit verwies er auf den Austausch mit Forstklassiker „Cotta“ und „König“ sowie anderen wichtigen Oberforestmeister, Wildmeister und Hofjäger, und auf Verbindungen zu Ausschüssen für Forst- und Jagdwirtschaft. Schließlich betrachte ich entstand 1902 das Buch『Forstästhetik』von Salisch und 2005 das Buch『Waldästhetik über Forstwirtschaft, Naturschutz und die Menschenseele』 von Stölb, aus der Perspektive einer inhaltlichen Neufassung—Umschrift oder Transkription.

キーワード: 森林美学, ザーリッシュ, ゲーテ, 郷土景観, サイコトープ

Schlüsselwörter: Forstästhetik, v. Salisch, Goethe, Heimatlandschaft, Psychotop

Korrespondenzautor (E-mail: mshiba@agr.u-ryukyu.ac.jp)

はじめに

「土地純収益説」と「森林純収益説」の論争の渦中にあつた1885年、ザーリッシュの『Forstästhetik』初版が刊行された(1902年に第2版¹⁾, 1911年に第3版と、ほぼ四半世紀を経て刊行)。この第2版の英訳本が米国ジョージア大学のW. クック Jr. とD. ヴェーラウにより2008年に出版され、十年後の2018年、その日本語翻訳版²⁾が出版された。かつて日本では、1918年に北大の新島善直と村山醸造が『森林美学』³⁾として、当時のドイツの森林施業法や美学的分析法を北海道の天然林に応用を目指した。その復刻版が1991年に出版された。これは、我が国の森林美学に関する大系化された初めての書物であり、今田敬一による「森林美学の基本的問題の歴史と批判」の研究へと受け継がれることになる。

近年、エコツーリズムやレクリエーション・森林セラピーなど生態系サービスの文化的価値が再認識されてきている。森林美学は、経済学(木材利用)と生態学(自然保護)の二元的・二律背反的に評価される価値ではなく、森林と人間の直接的な関係として、五感的な知覚や感情の経験を通して相対的に認識評価される価値と言えるものである。その意味で、“**サイコトープ Psychotop: 人と森の連携場**”としての価値を体現するものとして、現代的意義を見出し得るものと考ええる。

本稿では、まず森林美学誕生の背景について、17世紀末から20世紀初頭のドイツ林学・林業の発展過程や当時のヨーロッパの啓蒙主義やロマン主義の思想との関係から議論する。特に、ヴァイマル時代の宮廷顧問としてのゲーテの公務を通して、林学や林業の知識を得たコッタやケーニッヒとの交流、その他の重要な森林監督官、林業や狩猟管理に関する諸

委員会等との繋がりについて言及する。最後に、1902年のザーリッシュの『Forstästhetik』と2005年に出版されたステェルプの『Waldästhetik über Forstwirtschaft, Naturschutz und die Menschenseele 森林美学- 林業, 自然保護および人間の魂について』⁴⁾について, “リキャスト “という視点から考察した。なお, 本研究については一連の学会発表⁵⁻⁸⁾並びに造園雑誌「ランドスケープデザイン: マルモ出版」⁹⁾によりその一部を紹介している。

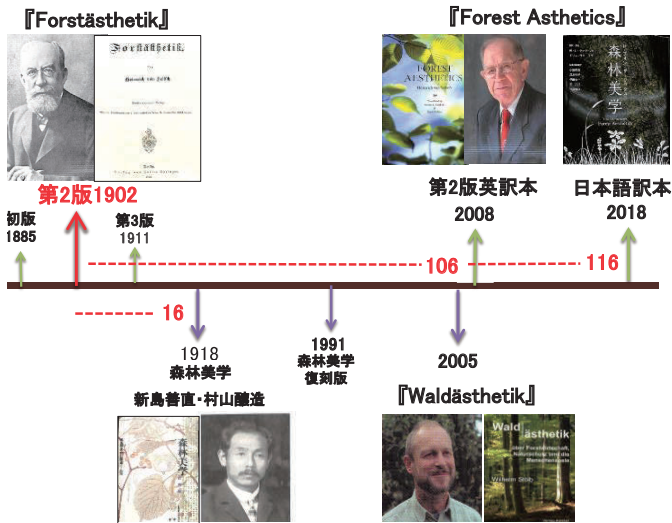


図-1 「森林美学」出版年譜

Abb.-1 Erscheinungsjahr 『Forst-Waldästhetik』

森林美学誕生の時代的背景

ほぼ1世紀前の連邦国家体制のドイツにあって、ザーリッシュ(H.v. Salisch, 1846-1923)の『Forstästhetik』が出版された。その出版は、後に、“値付け林業 Forstwirtschaft der Preise”論争とも揶揄的に呼ばれ¹⁰⁾、その後も70年近く続く「土地純収益説: Bodenreinertragslehe」と「森林純収益説: Waldreinertragslehe」¹¹⁾の論争の真っ只中であり、18世紀中葉までの「官房学: Kameralwissenschaft」¹²⁾の時代から20世紀中葉の近代林学成立までの過渡期であった。一方、近代ドイツ林業の発展期とも称されるこの時期は、専門的な知識に基づく計画的利用により生産活動を活発化し、一つの産業部門として林業を成立させようとした時代でもあった。^{11, 12)}なおこの直前の18世紀初頭(1713), 『Sylvicultura oeconomica, oder haußwirthliche Nachricht und Naturmäßige Anweisung zur wilden Baum-Zucht 林業経済- 野生樹種の育成序説』¹³⁾を執筆し、その本の中で”持続可能性: Nachhaltigkeit”の概念-「・計画的な企図, ・儉約的な利用, ・次世代への責務, ・国民経済への寄与」, を行動原理として言語化したカルロヴィッツ(H.C. Carlowitz, 1645-1714)も忘れてはならないが、今日の持続可能性を標榜する森林管理の保続原則や収穫規整法のほとんどがこの時期

に体现化されている。もともと領邦国家の国有林を対象として財政基盤強化を主目的とした林業経営の概念・実践法ではあったが、後述するメラー(A. Möller, 1860-1922)の「恒続林思想: Dauerwaldgedanke」¹⁴⁾に代表されるように、その後の合自然的”Naturgemäße”な森林管理法の端緒となったことも事実である。^{14, 15)}ザーリッシュの『Forstästhetik』と冒頭で紹介したステェルプの『Waldästhetik』は、森林を対象とした両時代の社会的認識と自己発揚としての規範的価値観や方法論の定式化にその違いを見ることが出来る。それは、純収益説の論争や近年の林学分野の再編(林学から森林科学へ)のプロセスとどこか相似的である。



図-2 カルロヴィッツと著書”Sylvicultura oeconomica”の表紙・章頭挿入絵

Abb.-2 H.C. Carlowitz, Titelblatt und Vignette aus “Sylvicultura oeconomica”

(出典: ミュンヘン工科大学 TUM・ヴァイエーンシュテファン生命科学センター図書館)
(Quelle: Universitätsbibliothek- Wissenschaftszentrum Weihenstephan, Technische Universität München TUM)

森林美学成立の立論系譜

ザーリッシュが森林美学において主張した「施業林の功利と美の調和」の思想的背景について、当時の林学や林業の状況等から考察する。まずザーリッシュは当時の支配者階級であるユンカーであり、世襲の土地所有者として財産林の自由な経営裁量権を有していた。このことは、経済性と管理技術が林業経営の継続性を担保する要件であり、当時としては収益性の高い針葉樹林の造成による施業林の森林美の意義を主張したと言える。これに対して林学界からの評価は様々で、図-3にその概略を示したように、当時の土地純収益説派の多くは施業林の功利と美の不調和を主張し、これに対して森林純収益説派は概ね功利と美の調和を容認する立場であった。当時の学界の重鎮の一人であり、後に古典林学の大家”Forstklassiker”と呼ばれるプファイル(W. Pfeil, 1783-1859)は、立地論の見解から針葉樹一斉林の功利と美の対立性と針広混交林での可能性を示唆した。造林学の権威で混交林と画伐作業による「近自然的林業: naturnahe Forstwirtschaft」を主張したガイヤー(K. Gayer, 1822-1807)

は、美の要求を認めつつ功利的要求に対する従属性を指摘した。ガイヤーの後継者であるマイヤー(H. Mayer, 1856-1911)も、混交林の自然美を念頭に施業的な保護育成の視座で調和論を肯定した。またブルックハルト(H. Buruckhardt, 1811-1879)は、施業林の管理条件の有無を前提に基本的な調和論の立場に立った。最後に「森林の生物生産総体: Gesamtheit als produzierenden Organismus」を主張し、その後の合自然的森林管理の実践に大きな影響を与えたメーラーは、恒続林の景観的美の潜在性は肯定したが、経済性の保続原理を前提とする国有林の場合の施業的な美の調和には否定的であった。^{11, 14-16)}

森林美学の社会文化背景

次に、林学を含む周辺分野や人物、社会的諸事象との関係から論考する(図-4)。その筆頭は、文豪ゲーテ(J.W. Goethe, 1749-1832)である。彼は1775年、当時のザクセン-ヴァイマル公国(現チューリッゲン州の一部)カール・アウグスト大公(K. August v. Sachsen-Weimar, 1757-1828)に宮廷顧問として招聘され、枢密院議員、大臣などの要職を歴任してそこで生涯を終えた。このヴァイマル時代に文学活動や公務の傍ら自然科学に関

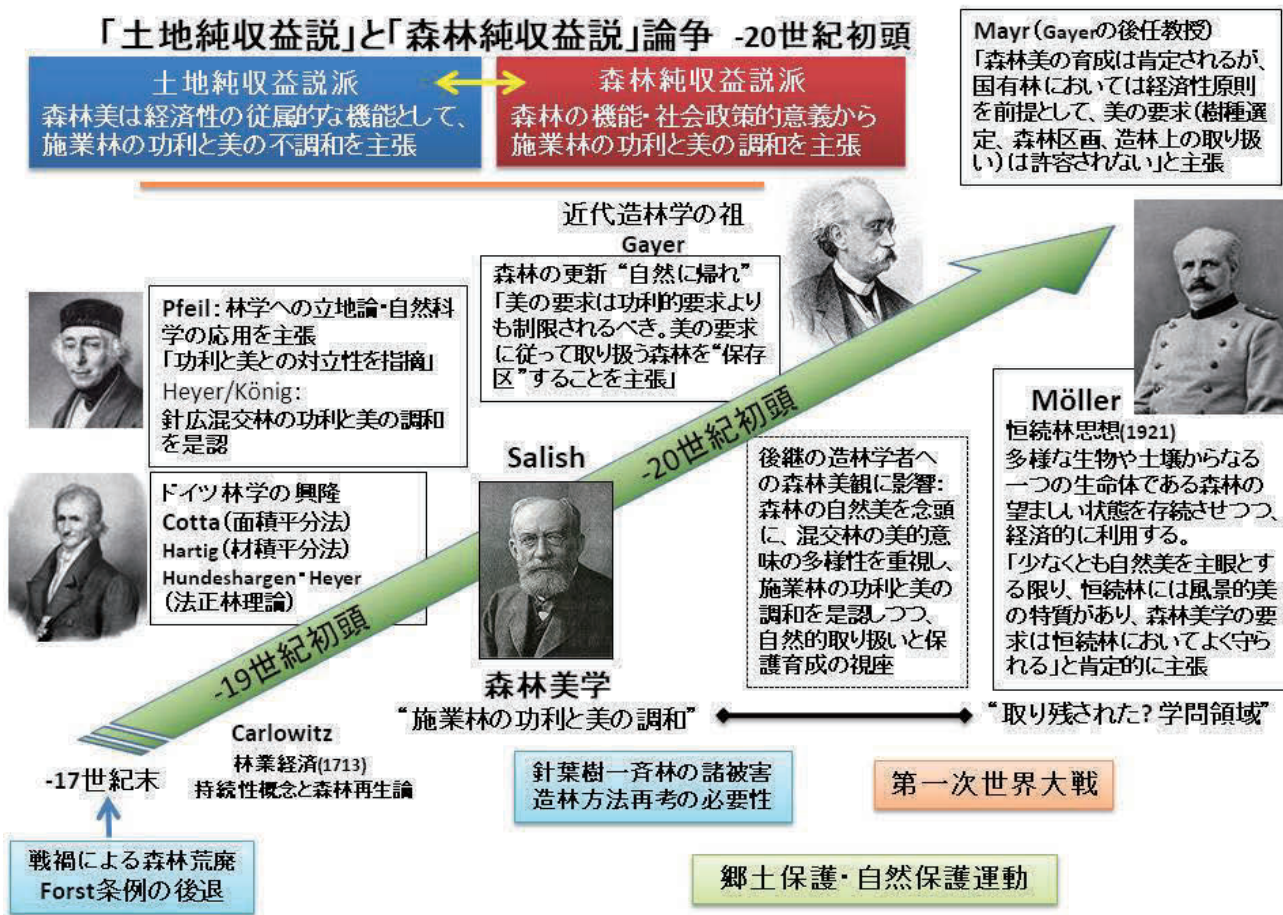


図-3 森林美学成立の立論系譜
Abb.-3 Argumentationslinie der Etablierung von Forstästhetik

以上のように、当時の林学・林業分野での森林美学に対する姿勢は必ずしも受容的なものではなく、“取り残された学問領域”として暫く黙殺の状況が続くことになる。皮肉にも森林美学が恒続林思想ともに注目されるようになるのは、民族主義が台頭したナチスドイツ政権下であった。

する研究や多くの著作を残しているが、特に植物の形態変化に関する『植物変態論: Der Metamorphose der Pflanzen』は、ドイツ古典林学の大家コッタ(H. Cotta, 1763-1844)やその子弟(義弟)ケーニッヒ(G. König, 1779-1849)の植物成長と樹液流動に関する研究、木材の解剖学的構造と組織分化に関する研究などの専門的助言を受けたものであり、『色彩論: Zur Farbenlehre』はザーリッシュの森林美学の景観色彩評価の教本ともなった。なお、ゲーテはターラント(ザクセン王国ドレスデン郊外)の林業アカデミーの校長であったコッタをその後もたびたび訪問し、植物や鉱物標本の作製、材幹コ

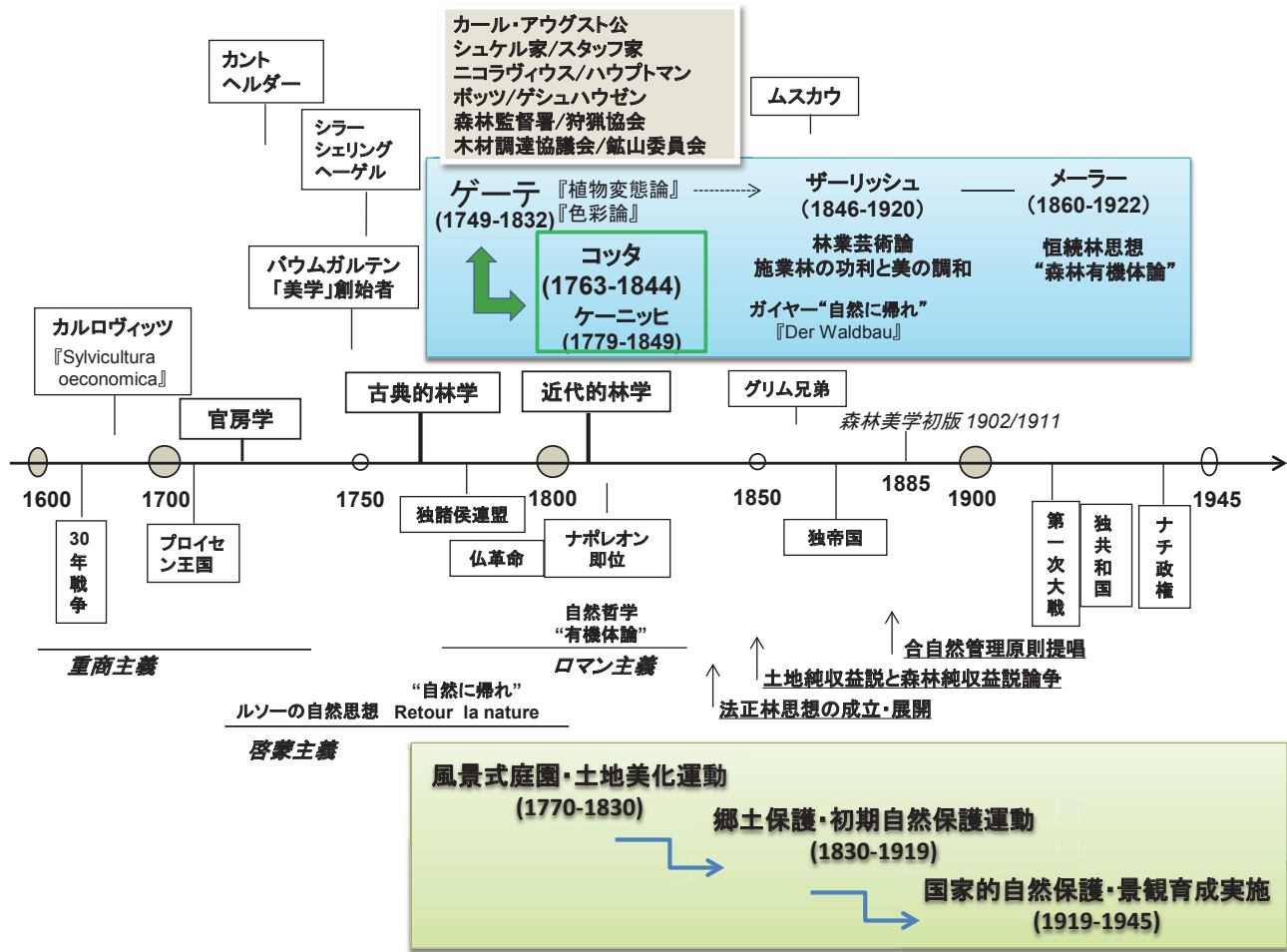


図-4 ドイツ林学—森林美学：成立過程と主要な社会事象
Abb.-4 Deutsche Forstwirtschaft-Forstästhetik:
Gründungsprozess und wichtige gesellschaftliche
Ereignisse

レクシオン収集、ヴァイマル公園やイエナ植物園の設計など、林学や造園学をはじめとする広範な自然科学について学んでいる。一方、ワイマール公国の官吏として地方森林監督署や狩猟協会、木材調達協議会、鉱山委員会等との繋がりを通して、現場での森林管理や野生動物・狩猟管理の実践、造林樹種選定や木材利用、代替燃料の調達等の政策立案にも関わっている。その中で特記すべき人物を挙げると、森林調査や測量、猟区や野生動物管理など林学や狩猟学の全般について、森林監督官や野生・狩猟監督官として助言したシュケル一家 (J.V. Schkell, J.L.G. Sckell, J.C. Sckell)。特に、J.C.シュケル (Johan Christian Schkell, 1721-1778) は、アイゼナハ及びヴァイマル両地域の詳細な森林調査を実施し、公国全域に渡る実効的な森林計画樹立のために尽力した。また、ゲーテの甥で林業教育や技術向上、林業訓練所の設置等を提案した森林監督官ニコロヴィウス (F.Nicolovius, 1800-1881)、公共建築物や都市設計について助言した宮廷狩猟官のハウプトマン (A.G.Hauptmann, 1735-1803) とボッツ (J.G.Botz,

1771-1849)、ヴァイマル公国の最初の森林調査簿 (Forstlagerbuch) を編集し、1710年に初めての林学の科学雑誌と呼ばれる「Notabilia venatoris oder Jagd- und Weidwercks-Anmerckungen: 狩猟と牧草地の特記メモ」を執筆した地方森林監督官ゲシュハウゼン (H.Gochhausen, 1663-1733) 等である。

政策的な事項として、慢性的な木材不足に苦しむジルバッハ森林巡回区の木材調達に関する諸問題 (隣国マイニンゲンとの領有地問題、ジルバッハの 猟区と林地の土地利用紛争、木材の売り払い方式等) の解決、イルメナウ鉱山 (銅、銀、マンガ) の再開と坑木、精錬用木材の供給、木材の代替燃料 (石炭、歴青) 探索調査、外来種 (ニセアカシア、ダグラスファー他) や他地域の固有種 (カラムツ) を含む造林樹種 (カエデ、ハンノキ、カバノキ、ポプラ、ヤナギ等) の播種・育成試験と植物園造成、林業教育や就業制度の改革 (森林官試験科目・登用条件: 狩猟学に対する林学の評価、イエナ大学での森林監督官の官房学学位取得、コッタの私設林業教習所の開設許可: 後に州立林業アカデミーへ昇格) 等が挙げられる。これらはいずれもゲーテと林学・林業との接点を物語る事実である。^{11, 12, 17-19)}

次に、美学に関する芸術や哲学等の周辺分野の人物としては、バウムガルテン (A. Baumgarten, 1714-1762) やヘルダー (J. Herder, 1744-1803) 等が挙げられる。なお、17世紀から18世紀中葉に至る啓蒙主義やロマン主義の思想と林学的な理論構築との関係も興味深い点であり、啓蒙主義を代表するルソ

一派の自然思想” 自然に帰れ: retour à la nature ” は, 前述のガイヤーの近自然的林業の” 自然へ帰れ: Rückker zur Natur “と, シェリング(F. Schelling, 1775-1854)を始めとするロマン主義派の自然哲学の概念 “有機体観: Beobachtung des Organischen “は, メーラーの「恒続林思想: Dauerwaldgedanke」の森林の有機体論- “生物生産総体: Gesamtheit als produzierenden Organismus “と, 表現的な類似性が認められる. ガイヤーやメーラーは, 同時代の啓蒙主義やロマン主義思想の諸知見を積極的に摂取して彼らの理論的構築を成したと言えるかもしれない.



図-5 ゲーテの “セイヨウネズ” の植物標本

Abb.-5 Goethes Wacholderbaum

(出典/(Quelle: Aus M. Wagner, Goethe und die Forstwirtschaft, S.127, 2007)

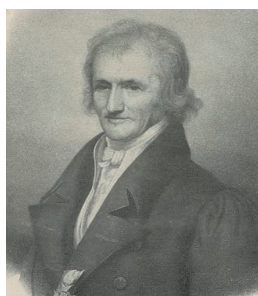


図-6 ハンリッヒ・コッタ (左) とゴットロープ・ケーニッヒ (右)

Abb.-6 H. Cotta (Links) und G.König (Richtig)

(出典/Quelle : <https://en.wikipedia.org/wiki/>)

森林美学- Forstästhetik から Waldästhetik へ^{注4)}

“Waldästhetik, der vergessene Wertehorizont”

Kaum bemerkt von der Öffentlichkeit verändern unsere Wälder ihr Gesicht. Zwischen Ökonomie(Holznutzung) und Ökologie(Naturschutz)

schwinden sinnliche Wahrnehmung und emotionale Beziehung.”

“森林美学, 忘れられた価値観”

“私たちの森がその姿を変えてきていることに一般の人が気づくことは, 今やほとんどありません. 経済(木材利用)と生態学(自然保護)のはざまに, 五感的な知覚や感情的な関係が衰えてきているからです.”

“Wald bringt wieder Geld”

Nach Jahrzehnten schwieriger Ertragslage hat der Boom nachwachsender Rohstoffe die deutsche Forstwirtschaft wieder zu einem lukrativen Geschäft gemacht. Um die rasant steigende Holznachfrage zu befriedigen und entsprechende Gewinne einzufahren, versucht man, große Mengen möglichst rationell zu produzieren. Bemühten sich Förster bis in die neunziger Jahre noch, einen schönen Erholungs- und Erlebniswald für die Bevölkerung zu gestalten, ist dies heute nur noch Thema von Werbebroschüren und Sonntagsreden. Betriebswirte und Technokraten haben das Ruder übernommen, in erster Linie ist der Wald Wirtschaftsobjekt.

“森はまたお金を運んで来ています”

“何十年もの厳しい収益状況の後,再生可能な資源ブームは,ドイツの林業を再び有利な事業にしました. 急速に増大する木材需要に応え,それに見合うような利益を得るために,可能な限り合理的に大量な木材を生産しています. 美しいレクリエーションの森や体験の森を作るために, 90 年余りの歳月を費やしてきた人達の努力は, 広告パンフレットや日曜日の教会の説教の話題にはなっています. 森を商業的な目的としてその舵取りを行っているのは, ビジネスエコノミストや技術官僚達なのです.”

前文は, 2005 年出版の『Waldästhetik über Forstwirtschaft, Naturschutz und die Menschenseele, von W. Stölb 森林美学- 林業,自然保護および人間の魂について, W. ステェルブ著』の Waldwissenschaft.net- WSL, CH 掲載書評の一部を抄訳したものである.

短い文章ではあるが,十数年前のドイツの森林業の現状-州有林組織の構造改革や管理形態の変更による合理化の波, 民有林を含む林業・林産業の生産力強化や効率性向上という重要課題-, に対する著者の思いが伝わってくるようである. なぜなら, ステェルブ自身,長年,バイエルン州有林に勤務していたからである.⁴⁾

さらに,ザーリッシュの時代の第一・第二の波 (Die erste und zweite Welle): 「第一波: 針葉樹林一斉造林の拡大」, 「第二波: 土地純収益説に基づく林業会計体系」と森林美学『Forstaldästhetik』を「合理性と反流: Rationalität und

Gegenströmungen」]として対極的に位置付け、“1885年から1911年の間に彼（ザーリッシュ）の本『Forstästhetik』3版が出ました。それは明らかに人間を含む森林の愛によってもたらされたものです。彼が呼んだ「林業芸術」は、森を“Holzacker:木材畑”としてではなく人がそれを楽しむようにするものでした。勿論、彼は自身の所有する森林の経営で糧を得ていたのですが…。しかしザリッシュにとって、森とは単なる木材、資本、そして資源以上のものでした。ザリッシュの本を読んで今日欠けている森との密接な関係について改めて気付かされました。”と、経済性と同様に景観美の価値を評価するザリッシュの考え方に共感している。さらに、“1800年代初めの第一波、1900年代の第二波の後、林業はその方向を大きく変えました。が、2000年代に入り、合理性への三度目のスパイラル転回（Eine dritte Drehung der Spirale Richtung Rationalität）を経験している。”と、前述の森林業の現状を一連の歴史的流れとして捉えようとしている。『Waldästhetik』では、人とその経験をより重視する「美的価値の創造」という点に関して、“Wald”と“Forst”はお互い重なり合っている。目標とするところは、森林景観の特定の調和という点にある。経験の調和、人間の影響—林業は絶対的に肯定される行為であるが、他方、ウィルダネス（荒野）の野性的独創性も含まれる。それは、森を「ただ美しく」することではなく、感覚で体験できる多様性と特異性を実感経験させることであるとし、そのことを“林業、自然保護および人間の魂”の副題に込めている。ステルブは森林の美的価値が、経済学（木材利用）と生態学（自然保護）の二律背反としてではなく、人間の五感的な知覚や感情の経験から生じられるということを、ザリッシュの『Forstästhetik』を『Waldästhetik』として“リキャスト”することで立論を試みたと考察する。

以下に彼の著書の章立てを抄訳して示す。

1 なぜ森林美学なのか？

- 1.1 およそ1800年～1920年期の森林美学
- 1.2 古い「森林美学」の弱点
- 1.3 「官能的実現」から
- 1.4 「冒険社会」
- 1.5 サイコトープ（人—自然の連携場）としての森
- 1.6 再び中心にいるのは人間ですか？
 - 1.6.1 人間に関する特別なこと
 - 1.6.2 「母なる自然」のすべて
 - 1.6.3 自然保護の基礎としての人間の感情？
 - 1.6.4 味わう森を設計しますか？
 - 1.6.5 人間の自己利益としての美学？
- 1.7 自然愛—昔ながらの用語？
 - 1.7.1 私たちの社会における愛の問題
 - 1.7.2 疑わしい感性：自然愛
 - 1.7.1.2 ヒューマンイズムの倫理的ギャップ
 - 1.7.2.2 ロマン主義における自然の変容
 - 1.7.2.3 人間化された性質
 - 1.7.3 自然の現代的な愛についての考え

- 1.8 保全—すべてのエコ

2 森林を敏感に体験する方法

- 2.1 森林の自由
- 2.2 応答
- 2.3 シンボルとしての森林
- 2.4 瞑想の場所
- 2.5 森の中の時間
- 2.6 森と芸術
- 2.7 ウィルダネスの予感
- 2.8 利用の美学
- 2.9 森林巡管区
- 2.10 狩猟区
 - 2.10.1 猟師（ハンター）
 - 2.10.2 狩猟動物
 - 2.10.3 野生管理
- 2.11 私の森—私の木
- 2.12 メディアの中の森
- 2.13 美的だけでなく

3 実用的な森林美学

- 3.1 美的価値の獲得
- 3.2 全体的な目的
- 3.3 特定の目的と手段
 - 3.3.1 いい空気と休息
 - 3.3.2 自然性
 - 3.3.2.1 管理形態と更新過程
 - 3.3.2.2 保育と間伐作業
 - 3.3.2.3 人間の影響の異なる兆候
 - 3.3.3 混交
 - 3.3.3.1 景観の大規模な多様性と特異性
 - 3.3.3.2 地域の森林構成の変動
 - 3.3.3.3 個々の森林面積の変動
 - 3.3.4 古い木
 - 3.3.5 森の動物
 - 3.3.6 秩序
 - 3.3.7 森林歩道
 - 3.3.7.1 コース
 - 3.3.7.2 歩道の状態
 - 3.3.7.3 道標
 - 3.3.8 他の景観要素との代替
 - 3.3.9 特徴的なポイント
 - 3.3.10 地域の森林担当者
 - 3.3.11 誰も要求しないもの
- 3.4 森林の美学、経済、生態学の対立

4 教育と訓練における自然と森林の美学

5 展望

6 用語集

7 キーワードと索引

8 参考文献

9 脚注

10 あとがき

要 約

ザーリッシュの『Forstästhetik』に述べられている“施業林の功利と美の調和”とは、木材生産と同等に森林景観を重視する合自然的な森林経営の在り方であり、その姿をどの様に具体的に実現するかの管理手法の提示であったと言える。官房学のカルロヴィッツに始まり、中世以降の慣習的な自然法（村落・耕作地・放牧地・狩場を含む）のヴァイスチューマー（Weistüme）、ヴァルトオールドゥンング（Waldordnung）、フォルストオールドゥンング（Forstordnung）諸法を基礎に、自然科学的学問体系へと成形されるドイツ林学の発展過程にあつて、経済に偏重した森林の取り扱いやそれによって失われる地域景観の美の是非が社会経済や文化的背景を含めて議論される中、ザーリッシュの著書や実際の森づくりによって醸成された。その後、ドイツの自然保護・農地や森林を構成要素とする地域景観、いわゆる”郷土的景観（Heimatlandschaft）”保全の運動²⁰⁻²²を通して森林美学の考え方は評価され、社会に受容されていった。本稿では、まず森林美学誕生の背景について、17世紀末から20世紀初頭のドイツ林学・林業の発展過程や当時のヨーロッパの啓蒙主義やロマン主義の思想との関係から議論した。特に、ヴァイマル時代の宮廷顧問としてのゲーテの公務や自然科学の研究について、後にドイツ古典林学の大家と呼ばれるコッタやケーニヒとの交流、その他の重要な森林監督官、林業や狩猟管理に関する諸委員会等との繋がりについて明らかにした。最後に、1902年のザーリッシュの『Forstästhetik』と2005年に出版されたステルブの『Waldästhetik über Forstwirtschaft, Naturschutz und die Menschenseele 森林美学- 林業, 自然保護および人間の魂について』について、“リキャスト”という視点から考察した。

注 記

注 1) 「土地純収益説: Bodenreinertragslehre」と「森林純収益説: Waldreinertragslehre」

林業の最大利益とは何かという問題について、ドイツで70年近くにわたり両理論の対立論争がなされた。土地純収益説は、継続的な地代で計られた利率（土地貢租：土地純収益）を可能な限り最大にすることを経営の目標とするもので、プレスラー（M. Pressler, 1815-1886）によって1858年に発表された。この理論をいち早く取り入れたザクセン国有林では、ブナなどの広葉樹を皆伐して利回りの高い針葉樹林（主にトウヒ）の一斉造林方式に転換していった。その後、他の邦領国家にもこの理論が取り入れられていった。これに対して、森林純収益説は、収入から支出を差し引いた超過部分（森林貢租：森林純収益）を最大限にすることを森林の管理・経営の目標にする

もので、1885年に発表されたバウル（F. Baur, 1830-1897）の説に代表される。この学説の特徴は、択伐を基本として針葉樹と広葉樹の混交林の造林方式を推進したことであり、バイエルン州有林をはじめとしてその後広まっていった。

注 2) 官房学: Kameralwissenschaft

17世紀から18世紀のドイツで発展した重商主義的な実践的学問の総称。今日の財政学、経済学、政治学に相当する内容をもつが、実際にはそれよりもはるかに広範な領域を対象としており、商業・金融、鉱業、農林水産業、畜産狩猟業などの諸産業経営部門に及んだ。当時ヨーロッパ最大級の銀鉱山があったザクセン・フライベルクの鉱山監督官として、カルロヴィッツは代表的な官房学派の官僚の一人であった。

注 3) 恒続林思想: Dauerwaldgedanke

メーラーが提唱した思想で、森林は、林地と林木とそれ以外の様々な生物の有機的關係の健全な調和に基づいて維持されるという「森林の有機体説」を根本思想とする考え方。林地の保護と林木の保育に重点をおいて、森林の健全性を維持する択伐施業などを実施する方式。大径木材の単木択伐と天然更新を基本に混交異齢林の造成を基本とし、皆伐を否定する。



図-7 アルフレート・メーラーと彼の著書“恒続林思想- その意味と意義”

Abb.-7 A. Möller und sein Buch “Der Dauerwaldgedanke Sein Sinn und seine Bedeutung“

(出典/Quelle: <https://dauerwaldstiftung.de/alfred-moeller/>)

注 4) 「Wald」と「Forst」

「Wald」は、一般的には樹木で覆われた地表部分であり、前後の文脈から一定の最小範囲や大きさを有した場所として定義される。森林生態学で広く使われている定義は、「本質的に樹木で構成され特徴的な森林気候が発達する大きな表面を覆う植物形成物」である。他方、「Forst」は中世以降歴史的にその定義は異なっているが（場所については、村落、耕作地、放牧地、狩場等を含み、管理主体については、連邦君主、地方荘園領主、村落・都市共同体など）、一般的には特定の所有権・利用権等が成立している管理された森と理解されている。た

だしこのような両者の定義は曖昧な部分があり、一般的な使用法 (Sprachgebrauch) や法的文書 (Gesetzestexten) でさえ文脈から使い分けがなされている。本論も基本的に両用語の使用はこれに準拠した。

文 献

- 1) H. Salish (Trans. W. L. Cook Jr. · D. Wehlau).2008. FOREST AESTHETICS. Forest History Society, North Carolina, pp.1-351.
- 2) 小池孝良他.2018.森林美学, 海青社, 大津, pp. 1-329.
- 3) 新島善直・村山醸造.1991.森林美学 (復刻版).北海道大学図書刊行会, 札幌, pp.1-680.
- 4) W. Stölb.2005.Waldästhetik über Forstwirtschaft, Naturschutz und die Menschenseele, Verlag Kessel, Remagen, pp. 1-400.
- 5) 芝 正己.2018.森林美学の系譜と現代的意義-やんばる国立公園地域の森林景観保全の課題.平成30年度亜熱帯森林・林業研究会発表要旨, P. 6.
- 6) 芝 正己.2018.森林美学の系譜と今日的意義.第74回九州森林学会大会 講演番号112.
- 7) 芝 正己.2019.森林美学の系譜と現代的意義.第130回日本森林学会大会, 学術講演要旨集, B8-233.
- 8) 芝 正己.2019.地域自然景観としてのやんばる森林の景観施策に関する一考察.令和元年度亜熱帯森林・林業研究会発表要旨, P. 9.
- 9) 芝 正己.2019.[第3回]森林美学誕生の背景-ドイツ林学と森林美学. LAMDSCAPE DESIGN, No. 128 : 104-107.
- 10) G. Oesten. 2015. Über ökonomische Theorien der forstlichen Nachhaltigkeit, Uni-Freiburg Arbeitsbericht, 60 :7-47.
- 11) カール・ハーゼル (山縣光晶訳).1996.森が語るドイツの歴史.築地書館,東京, pp. 1-273.
- 12) ヨアヒム・ラートカウ ((山縣光晶訳).2013.木材と文明が語るドイツの歴史.築地書館,東京, pp. 1-349.
- 13) H. Thomasius · T. Bendiz. 2013. Sylvicultura oeconomica- Transkription in das Deutsch der Gegenwart. Verlag Kessel, Remagen, pp.1-368.
- 14) 小沢今朝芳.1968.ドイツ森林経営史, 日本林業調査会, 東京, pp. 1-359.
- 15) 筒井迪夫.1996.ドイツ林学の流れと現代の意義, 林業技術, 654: 2-6.
- 16) 秋林幸男.2010.「森林美学」を考える (湊 克之他, 森への働きかけ: 381p.), 海青社, 大津, 29-59.
- 17) M. Wagner.2007. Goethe und die Forstwirtschaft. Verlag Kessel, Remagen, pp.1-151.
- 18) K. Hasel · E. Schwartz. 2006. Forstgeschichte- Ein Grudriß für Studium und Praxis. Verlag Kessel, Remagen, pp.1-394.
- 19) H.-J. Wegener. 1999. Verantwortung für Generation, Hainholz Verlag, Göttingen, pp. 1-352.
- 20) G. Winkel. 2007. Waldnaturschutzpolitik in Deutschland. Verlag Kessel, Remagen, pp.1-561.
- 21) 北山雅昭.1997.ドイツにおける自然保護・景観育成の歴史的発展過程と法, 比較法学, 25 (2) : 1-37.
- 22) P. Poschlod. 2015. Geschichte der Kulturlandschaft. Eugen Ulmer KG, Stuttgart, pp.1-320.